

不登校・ひきこもりがちな子ども・若者と向き合って

子ども・若者の生きづらさ

―競争と比較と評価が学校と家庭に

認定NPO法人花の森こども園 大久保 はるみ

子どもの内からの発達を促す

2008年、遊びを大切にして幼児期を過ごさせたい5人の母親と共に通年の幼児教育を実践する「花の森こども園」の活動が始まりました。里山をフィールドにし、自然を教材にしたことで個々の子どもの発達に寄り添い、子ども自身の内からの発達を促すことができると保育スタッフは確信しました。そのことは子育て中の親にも次第に理解・支持され、2010年にNPOの法人格を取得し、環境教育を基礎にした「ようちえん」として地域に根付いてきま

した。

また、活動の範囲を拡げ幼児期から青年期の自立までを見通した活動として、2011年に不登校・ひきこもりの居場所「かなりや」を開設しました。その後2013年に若者の自立・就労までを視野に入れた多世代交流カフェ「ゆいっこ」、学習支援と生活支援を兼ねた「てらこや」を開設しました。さらに、2017年には社会的な信頼性を認められて「認定NPO法人」となることができ、2018年には多世代交流とこども食堂の機能を兼ね備えた「はらっぱい食堂」も始め、地域の人々とのつながりを深めてきています。

彼らの苦しさはどこから

不登校やひきこもりがちの子どもや若者と出会うとき「彼らの苦しさはどこから来るのだろうか？ 親たちの苦しさ・悩みは何なのだろうか？」と考えます。一見すると極端に際立った特徴や個性を持っているわけでもないのに学校に行けず苦しんでいる子ども、また人並みに働くべきと思うのにできないと悩み苦しんでいる若者ばかりです。不登校の小中学生はその原因を探り言葉にしていくよりも、「かなりや」でスタッフや仲間と一緒に楽しい時間を過ごしたり



はらっぱい食堂。多世代でにぎやかに食べます

幼児と交流していく中で緊張が解け、笑顔が増えていくと学校に戻って行ったり、高校への進路を決めていきましたが、学齢期を過ぎた若者の経過は違っていました。彼らはやって来た当初は自分が何をしたいのか分からず、対人恐怖の様子が見られ、親や大人のスタッフには話ができてても同年代を怖がっていました。カードゲームをしながらかおしゃべりをし、卓球やバトミントンで身体を動かしながら笑い合い、幼児や小中学生と交流するうちにいろいろな言葉がでてきました。親に対する反発や批判、そ

れでありながら依存し甘えている自分の中の矛盾や弱さや狡さ、これまで大人や学校に対して持っていた不信任感などです。本人の自覚の有無はありますが、さまざまな表現で語ります。しかし、「それって反抗期にやってこなかったの？友だちのおしゃべりで解消してこなかったの？」と聞きながらスタッフは思いました。小学校高学年から中高生頃までに反抗期を経験し、悩みを打ち明けられる友人と一緒に時間があり、地域には様々な違うタイプのモデルがいて親や先生だけが大人じゃないと気付けたのはかなり昔の話になってしまいました。彼らに言わせると、家庭の中の役割や学校の成績や友人関係の中での自分の立ち位置に気を遣っていたら、自分自身を出し切れない時間を過ごすうちに自分自身の気持ちなどがどこかに行ってしまったようなのです。家族の中での役割は、学校や友だち家族の中でよい評価がされる明るくて元気な子どもでいること。となると親は、他の友達と比べてより早くより上手くよりよい子で、そしてより良い成績がとれることを望みます。その結果子どもは家族の中の役割をはたし親の望みをかなえることにエネルギーを使い果たし自分が何をしたいのかわからなくなり、矛盾や不安を抱えてい

る自分自身を丸ごと受け入れられなくなり、家族や周囲の人間が認めてくれることだけに自分の存在意義があると感じるようになり、それをやれなくなれば自分の存在意義がなくなったと思う流れが若者たちの言葉から見えてきました。

家庭と学校が危ない

家庭の中に他との比較や評価が入り込んでしまったのは、それを社会が求めているからです。競争と比較と評価が学校だけでなく家庭にも持ち込まれた結果、子どもには学校も家庭も緊張せざるを得ない場になりました。加えて比べられる対象が同年代の友人やクラスメートですから心を開いて話のできる友人はできません。これは個々の家庭の責任ではなく、ましてや当事者である若者の責任ではなく社会的な問題と言わざるを得ません。

さまざまな人生のモデルとの出会い

若者達の言葉も参考に、2013年に開所した「ゆいっこ」は多世代が共に過ごす場所なので、親や学校の先生とは異なる人



2月にようちえんで作る味噌の大豆はゆいっこの
若者もお手伝いして収穫します

生のモデルに若者が出会うことができず。地域の夏祭りに参加した、農作業の手伝いやアルバイトに行ったり、ようちえんの手伝いをさせてもらったりと新しい体験を重ねながら仲間と共に参加する楽しさも経験していきます。これらの活動は競い合うことが目的ではないので、他者とのつながりが安定し自分自身の個性や適性を感じ取りそれを受入れることができます。自身を知り地域の中で生きていると感じたとき働くことに無理がなくなり、アルバイトから就職につながり正社員になった若者も複数います。

アルバイトが1年以上続き、父親との軋轢をさけて1人暮らしを希望する若者も出てきました。自立の過程として当然予想されていたので、当初はアルバイトの収入で家賃の全額は無理ならば親に援助してもらい、徐々に自分の力で全額を払うという仕組みの「脱皮ハウス」というシェアハウスを2018年6月に開所し1人が住み始めました。「ゆいっこ」に近いので仲間達が集まっては語り合いの楽しい時間を過ごしているようです。そして、1年間の1人暮らしを経験した彼の成長は目を見張るものがあり、若者の自立につながる1人暮らし

のために住居のハードルを下げることは重要な鍵になると感じています。

さらに、親御さんとのつながりも重要なので年に2回「親の会」を開き「ゆいっこ」の活動方針を説明し家庭での様子を聞く機会を作りました。親にできることと親にはできないことがあることや、頭で分かっているが無意識に親がやってしまっていることが、他の家庭の話として聞くことで腹に落ち納得ができるようです。また、親自身が自らの不安や悩みをカミングアウトすることも子どもと同様に自分自身の状況を率直に受入れる第1歩になります。今年の春の「親の会」で1人暮らしを始めた若者の父親は他の親御さんの話を聞いた後、「小さいときから自分とタイプの違う息子の些細なことが気になって仕方がなかった。古くて大きいシェアハウスと聞いて外側を見にいったら、隙間だらけで冬は寒いに違いない。家にいればそんな心配はないのだから帰ってこい、とさっきまでは言うつもりでしたが、皆さんの話を聞いて止めました。もう任せておきます。」と話してくださいました。子どもの自立は親の自立でもあり、対等の関係がそこからスタートするのだと思います。